
魔法大学の謎

尚文産商堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法大学の謎

【Nコード】

N4263K

【作者名】

尚文産商堂

【あらすじ】

魔法条約によって設置された魔法大学校。そこに偶然集まった6人が、あることに気付き……

プロローグ

マグス国には、”魔法”という能力を持つ人たちがいる。

普通の人たちでも持っている能力だが、一部の人たちはその魔法を使いこなす力がうまいという体質をもっている。

そういう人たちは、18歳になると、国立魔法大学校という教育機関へ入学し、力を暴走させないように教育を受ける。

この学校が設立されたのは、マグス暦321年のこと。

国内外で起こった数々の異常気象の影響で、数多くの人が餓死した。その異常気象を引き起こした原因が、過去類を見ない大量殺人者として永久指名手配とされている、通称ウルフと呼ばれる集団だった。彼らは、魔法を使い、数々の”実験”を行った。

詳細は分かっているが、主には田畑の改良やよりよい掘削法の研究ということになっているが、その中で、人体実験を用いたという痕跡が残っている。

そのいずれがきっかけとなり、この世界のバランスが崩れた結果、異常気象を引き起こしたとされている。

ウルフはその直後、どこへ行ったかわからないままとなっているが、それから1000年以上経った今でもそのことを引き起こしたとされて、指名手配が続いている。

この事件があってから、惑星上にある主権国家が集まり、魔法条約といわれる条約の集合を結んだ。

そのうちのひとつ、魔法大学校条約によって、各国に国立の魔法大学校を作ることが義務付けられた。

4年制で卒業と同時に魔法博士の称号を得ることができるということになっている。

その中で、寮生活をし、ともに勉学に励む者達は、9月の秋が始ま

ろうとするときから入学をする。

使い魔

魔法大学校の寮は、敷地内に設置されていて、直接教室へ行き来ができるようになっていた。

それどころか、敷地の仲は小さな町のような状況になっているため、外へ出る必要がないほどだった。

大学校内の行動は班別が基本とされ、男女混合の7人編成となっている。

その7人で、成績、掃除、授業などが決定され、その能力は平均的になるように設定されている。

そのため、班の中で、極端に魔法が上手な人と、対照的に下手な人が交じることになった。

第321班も、そんな極端な例が入ってしまった班の一つだ。

「やばいって、入学式は根性で起きたけど、その翌日から即遅刻っていうのはさすがに避けなきゃ！」

パンをくわえながら、教室めがけ走っているのはアスール・スペシアだ。

321班の女子の一人で、寮から全力疾走をして、どうにか間に合わせようとしていた。

チャイムが鳴る5秒前、激しく酸素を求めている体を無理に座らせ、落ち着かせようとしていた。

席順は昨日と同じところで、7人掛けの長机の一番左端、窓側になっていた。

「遅いって、何してたの」

「ごめん、寝坊しちゃって」

言った途端にチャイムが鳴り、教師がスーツ姿で入ってくる。

「では、授業を始める。最初の授業は、常に同じ。使い魔を創造してもらおう」

教室中を見回して、だれも遅れていないことを確認してから、教室の一番前にある黒板を使って、図式を書きだした。

「使い魔は、それぞれの人の気持ちと精神力と魔力、それに想像力によって変わってくる。基本的に各々の考えた姿が使い魔としてあらわれるが、最初に強く思い描いたものが、生涯使い魔の格好になる。まあ、多少なら後々でも変えることができるが、基本的には不可能だと考える」

教師は、名前も言わずにひたすら話し続けた。

それを要約すれば、想像力によって創ることができる使い魔は、最初は何も知らない状態であることが通常であるし、1人しか産まれることがないというが、ごく稀に、賢者といわれるタイプの知識をもった使い魔や、2人同時に産まれることがあるというところらしい。だが、そんな使い魔を産んだ生徒はこの10年間1人も出てきていないという話だった。

ひたすらそんな話を半時間ほど続けられた後、ようやく実際に創る作業へ入った。

「一人一人、精神を集中して：自分が生涯一緒にいたいと思う姿を思い浮かべるんだ…」

教師の声が、目をつむっている生徒の心の底へ語りかけるように聞こえてくる。

数秒、胸が圧迫されるような強い締め付けを感じ、一瞬で解放された。

「胸に強い締め付けが無くなったものから目を開けるように」

ゆっくりと私が目を開けると、机の上に30cmくらいの女性の妖精が座っていた。

「こ、こんにちは」

私は彼女に話しかけた。

「こんにちは。あなたは、アスール・スペシアよね」

「そ、そうだよ」

「私はあなたの使い魔よ。名前を付けてくれると嬉しいんだけどな」

「じゃあ、スピカで」

「スピカ、いい名前ね！」

彼女はそういって、ニカッと笑った。

「出てきたなら、名前を付けて、一緒に俺のところに来い。国に提出するための名簿を作るからな」

教師が言うと、次々と報告をする。

同じ班の中に、双子の使い魔と、賢者が現れたと聞かされたのは、私が並んでいるすぐ横だった。

「…二人合わせてジェミニだ。で、兄の方がカストルで、妹の方がポルックスだ」

私が並んでいるところから分かるのは、私の腰よりすこし小さめの子供が二人、髪の毛が右分けと左分けという差ぐらいしかなく、それ以外の見た目はそっくりだった。

「ねえ、横にいる怪物が、こっちを見てくるよ…」

ポルックスがカストルの陰に隠れるようにして、その怪物から逃れようとした。

「怪物とは心外だ。我は獅子、貴様らなど丸のみにしてくれy」

「うるせーよ、ちったあ黙れ」

口調は男だが、立派な女性であるカワスミ・スキヤットが、彼女の使い魔であるライオンに怒鳴っていた。

「申し訳ありません。しかし…」

「あたしが黙れつつたら黙るんだよ」

「はい」

やすやすとライオンを黙らせると、その顔をじっと見つめた。

「そうだな、デネボラだな。うん、決定な」

「それは我の名前でしようか」

「そう、デネボラだ。それに我つつー一人称はやめろ」

しし座にある一等星から名前を取るとは、そのまますぎる気がしたが、それは、二人の間の問題だから、私は何も言わなかった。

「名前を決めたなら、さっさと並べ」

教師に注意を受け、彼女たちも私が並んでいる列の一番後ろに並んだ。

授業が終わるまでに、全員が使い魔を出せるようになり、最後に注意を受けた。

「彼らは、君たちと同じ人間だと思え。ともに育ち、ともに学び、ともに暮らす。そんな存在だ。では、解散」

すぐに教師がいなくなる。

生徒は、その後にごそごそと次の授業の準備のために、15分間ある休憩時間の間に部屋を移動する。

「そういえば、みんなの使い魔って、どんな名前にしたの？」

私が、班員に聞いた。

最初に答えたのは、三輪彩夏さんわさやかだった。

「使い魔っていうよりか、彼氏っていう感じかな。アルクトウルスっていう名前よ」

「どうぞ、よろしく」

20代前半の清々しい感じの青年だった。

「こちらこそ」

「それで、スピーが背負っているクマは……」

スピーは、スピリング・アルマゲストのあだ名で、彼が背負っているのは、もこもこふわふわの毛皮をもっている小熊だった。

「こいつは、ポラリス。見た目通りの小熊だよ。ただ、疲れて眠ってるみたいなんだ」

「かわいいーなー」

とろけてしまいそうになっているカワスミを置いて、どこかの会社の重役に見える人を見つけた。

「えっと、ところでどちらさまでしょうか」

「グールド・ハイスの使い魔で、ケフェウスです。お見知りおきを」

「これから、よろしく願います」

一礼する姿は、たしかに重役だった。

「で、彼女は…」

私がポルックス・カストールに聞くと、女性の肩に手を回しながら話した。

「俺の彼女だ…ゴメン、嘘。俺の使い魔のアンタレスだ」

最初の言葉で白けたのを見ると、すぐに謝って続けた。

「アンタレスです。よろしくです」

班員全員がどうにか使い魔を手に入れ、さらに聞くと、賢者といわれるほどの知識をもった使い魔もいた。

「それは、我のことだな」

「だから、我ってやめろって」

キャットが相変わらず突っ込んでいる。

「賢者といわれるからには、いろいろなことを知ってるんだろうね」

「いかにも。古今東西、さまざまなことを知っておる。だが、それを教えるためには、主の許可が必要となる」

「べっつに、私は構わないわよ。私が背中に乗って眠りながら周り威嚇できる生き物って、最高じゃない」

すごく楽しそうに、彼女は話してくる。

私たちは、笑うしかなかった。

相互訓練

私たちが使い魔を創りだしてから半年。

魔術の基礎訓練、体力作り、使い魔との協調訓練などをおこなってきた。

だが、私の使い魔が常に一緒にいるとは限らないということらしく、別の人の使い魔と行動するという訓練も行われる。

大学校では相互訓練といわれるものだ。

その訓練を通して、何があっても共同して対処したり、単独で行動を起こすということを身につけさせるらしい。

今回の相互訓練の場所は、直径500mぐらいのグラウンドだった。だが、教師が魔法を使い、地平線の彼方まで広がっている大草原と化している。

そんな中で私が今回一緒になったのは、ジェミニだった。

「よろしくね」

「はい、よろしく願います」

兄妹そろって、かなりかわいい。

私の使い魔であるスピカは、グールドとコンビを組むことになった。毎回くじ引きをして決めるため、同じ人と何回も組むことになったり、逆にまったく組まなかったりすることもたまにあった。

教師が、それぞれ組んだことを確認してから、伝えた。

「今回は、この魔法空間の中にいる、テイクシーを生きたまま捕獲してもらいたい。制限時間は1時間。それでは、始め！」

笛を吹くと、同時に生徒は含めて走り出す。

まだ瞬間移動法は習っていないのだ。

それでも速歩法を使うと、5kmぐらいだったら3分ぐらいで行くことができる。

だが、賢者がいるところは別だった。

「eodem tempore」

言うと同時に、どこかへ消えた。

「そっか、あいつは賢者だったな…」

何かをメモすると、何事もなかったかのように、空中から椅子を取り出し座った。

私たちはそんなこと出来ないため、走り続けた。

「ねえ、このあたりにしない」

「分かった」

私が言うと、教師から5kmぐらい離れたところに罠を作ることにした。

ティクシーは、大人の男性の握りこぶしより一回り大きいぐらいの伝説上の生き物で、背中は蝶のような羽があり、遠くから見ると宝石のようにきらきらと輝いているといわれている。

一番近いのはスピカだろうが、彼女は実在する。

伝説上といっても、弱点とかを事細かに書いた書物もあり、それをもとにして罠などを作った。

ティクシーの好物であるゆず団子を串にさし、それを正三角形に並べた石の重心に刺す。

三角形を取り囲むように、円形に石を隙間なく置き、あとは私たちの姿が見えないように隠れる。

ジェミニは石の一つに化けることにしたが、私にはそんなことはできないため、少し離れたところに移った。

うつ伏せになると、ちょうど隠れるように草の高さが合わさっているから、隠れるのは簡単だった。

「あとは、相手が来るのを待つばかりね…」

私は、ふせながらつぶやいた。

空をかける風音で私は彼らが来たことを察した。

そつと顔を上げると、本の挿絵で見たままのティクシーが飛んでいる。

風になびくたんぽぽの綿毛のような感じで飛んでいる下に、ジェミ
ニの姿が見えた。

手に網をもつて、すぐに捕まえられるように風下へ動く。

ばれないように慎重に動き、一瞬で網を下から上へ動かし、網の口
を手で押さえた。

「とつたよー」

「見えてるよ」

ポルックスが嬉しそうに私に見せてくる。

私が見たときには、網の中には1つの黄色いビー玉が入っているだけだった。

「これを教師に見せればいいんだね」

カストルが私に聞いてくる。

「1つだけでいいのかな」

「いいんじゃない？」

ポルックスが小首をかしげていったが、私はいくつ取って来いとは言われてないため、別に構わないだろうと思った。

教師が待っているところへ戻ると、各自1つずつビー玉を持っていた。

「よし、これで最後はあいっただな…」

教師がバインダーに挟んでいる紙に私たちの名前を書き加える。

「で、誰かクロノスとデネボラの居場所を知ってる者は？」

「ここに」

ライオンと彼にまたがっているクロの姿が、教師の後ろに現れた。

「よつと、お待たせしました」

降りてから、教師にビー玉を見せる。

「それと、こんなものを見つけましたが」

ビー玉の中から、赤色のものを見せる。

それを見た教師が言った。

「それは良い腕前をしてるな。だが、賢者の力を使うのは、校規に反するということを知っているか」

「えっと…」

がっしりと二人の頭を押さえると、教師は有無を言わせない態度で伝えた。

「知らなかったとは言わせない。お前達、敷地の境界線にあるレンガの数を数えて来い。今から2時間以内だ。他の者たちは、休憩だ」
そう言って、教師とともにどこかへきえてしまった。

いつまでも、こんな楽しい時間が続けばいいと、思っていた。

家族

7月に入ると、私たちは期末テストを受けた。

それが終わると、8月の最終週まではずっと夏休みが続く。

その間は寮にいてもいいし、家に帰ってもかまわないことになっているため、私は実家に帰ることにした。

住所を班みんなに教えて、私とスピカは家に帰った。

来るときは車で送ってもらったが、帰るときは魔法を使い、すぐに家についた。

「ただいまー」

私は家にいるはずの両親に言った。

「はい、ああ姉ちゃん」

弟が出迎えた。

「ただいま、大きくなった？」

「そりゃ、1年間も帰ってこなかったら大きくもなるって。成長期だし」

前は私と30cmぐらい離れていたのに、今じゃ10cmに近づいている。

私よりも成長スピードが早いようだ。

「すごいねー、こんなに背が伸びるなんて」

「いいけどさ、そっちの妖精は誰？」

「ああ、私の使い魔のスピカ」

私の周りを軽々と飛んでいるスピカは、弟の頭の上に止まろうとした。

「初めまして、スピカよ」

「魔法大学校に行って、いろいろ変わったんだね」

「ん？」

スピカを頭に載せながら、弟はそう言ったが、何のことかわからな

かった。

とりあえず、玄関にいるのも疲れるから、自室へ向かうことにした。
「もとのまま、何も触ってないよ」

「ありがと」

ノブを回し、部屋の扉を開ける。

ホコリがつもっているのは仕方ないとして、それ以外はほとんど変わっていないかった。

「掃除がいるわね」

「窓開けようか」

スピカが頑張って窓を開けてくれている間に、家に一台しかない掃除機を引っ張り出してくる。

「そういや、母さんとお父さんは」

「二人とも買い物。今日は鍋だって、久々に姉ちゃんが帰って来たんだから、パーティーを開かないとって、張り切ってたよ」

掃除機を引っ張り出すのを手伝ってくれた弟に聞くと、水炊きの予定だと言っていたらしい。

「楽しみだなー」

「でも、二人ともスピカのことは知らないよ。どうやって説明するの」

「大丈夫、ちゃんと説明できるよ」

私は部屋へ戻りながら弟へ言った。

「えっと…」

窓を開け、机の上にあった物の隙間を掃除しているスピカに、私は言った。

「掃除機で全部吸い込もうと思うから、ちょっとだけ飛んでもらえる?」

スピカは黙ってふわふわ浮き始め、私の肩に乗った。

「まあいいか」

私は掃除機のコンセントを挿し、部屋の全体につもっているほこりを吸い取り始めた。

30分かけて、部屋全体をきれいにするとちょうど両親が帰ってきた。

「おかえりなさい」

私が玄関へ行くと、大きな袋を抱えさせられたお父さんと、小さな袋をブドウの房のように持っている母さんがいた。

「もう帰ってたのか」

お父さんが、私を見つけて話しかけてくる。

「うん、さっきまで部屋の掃除をしてたけど」

「それで、使い魔はもう創り出したのか」

「そうよ」

私はスピカを呼んだ。

「使い魔のスピカよ」

「よろしくお願いします」

「こちらこそ」

母さんは、靴を脱いでからスピカを見つけた。

「妖精……?」

「そうよ」

「それで、他の班員はどんな使い魔を創ったんだ」

お父さんが袋を弟に持たせて、靴を脱ぎながら私に話しかける。

「ライオンにおっさんに双子に……って、なんでお父さんがそんなこと聞いてくるの」

「ああ、言っていなかったか」

母さんと弟が全部の袋をもっていった後、私とお父さんは彼の部屋で彼の秘密を聞いた。

「俺の使い魔を紹介しよう」

お父さんの背中から出てきたのは、私の肩ぐらいまで背高がある大

きなオオカミだった。

「アルゴだ」

灰色のオオカミは、金色の瞳を私に向けて、ゆっくりと言った。

「初めまして、お嬢さん」

確かに、私はオオカミが笑ったのを見た。

アルゴと私はそのまま話しをしていたが、ふとお父さんに聞きたいことが湧いてきた。

「もしかして、お父さんも…」

「ああ、魔法大学卒業だ。魔法博士の称号をもっている。もつとも、いまとなってはほとんど意味がないがね」

お父さんの仕事は、電気技師のため、魔法の使う機会がほとんどなかった。

「ただ、アルゴは便利だ。いろいろ手伝ってくれるからな。簡単なものだったら彼自身で勝手に終わらせてくれるしね」

「スカットが言っているとおりではある。だが、私をひたすらこき使うと、怒りたくなる時もある」

「ははっ、そうだったね。学生時代、いろいろ怒らせてしまつて、教師に怒られたことがあったな」

「そうなの」

いつも見たことがないお父さんの、珍しい一面を見た気がした。

「そうそう、母さんと知り合ったのは、魔法大学校だったんだぞ。

あの時は良かったな」

急に思い出を語られ始め、感慨にふけっているお父さんを放置して、アルゴに話しかけた。

「時にはいろいろ教えてもらってもいいかな」

「ああ、私としては、使い魔共々しごいてやる。覚悟しとけよ」

アルゴはにやりと笑い、私とスピカは深々とお辞儀をした。

「よろしく願います」

お父さんは、そのまま無視をし続けられた。

振動

1週間後、私とスピカは、お父さんとアルゴに魔法について訓練を受けていた。

その頃、魔法大学寮寮にいる班から連絡が来た。

「図書館に来て欲しいって…」

「行ってこいよ。母さんには俺から伝えておくよ。何かあったら連絡をくれ」

お父さんたちは私たちを笑顔で見送った。

図書館は、大学寮寮の脇にある巨大なレンガ造りの建物で、地上6階地下2階で総蔵書数200万冊を誇る、国内最大の図書館だった。一般にも開放されている部分もあり、魔法大学寮関係者以外も利用できる世界でも数少ない図書館だった。

「こっちだよ」

2階の窓辺にある7人掛けの机の一つを使って、私の班が集まっていた。

「どうしたの」

「不思議なものを見つけたんだ」

キャットが私が座るとすぐに話し始める。

「この学校がどうして建てられたかは知ってるよね」

「うん、魔法条約で建てるのが義務化されたからでしょ」

そのあたりは、歴史の授業で習った。

「問題は、なぜ、ここに建てられたかなんだ。大学寮が建てられる前の歴史書を読んでいたら、不思議なことに、このあたりは何もなかったとされている。文字通りにね」

「空間が消えていたかのように、何も載っていないんだ」

キャットの最後の言葉にかぶるように、グードが話す。

「どういうこと」

私は二人の説明がよく分からなかった。

「この魔法大学校には謎がある。そういうことだよ。それも空間をここに生み出さなければならなかったような大きな謎がね」
ポルが話し続ける。

「それを調べてみないって言う話だったんだけど…実は、前にそれを調べていた人がいたことが分かったんだ」

「誰？」

「アースのお父さん達らしいよ。それがね」

お父さんが魔法大学校にいたという話は知っていたが、何をしていたかは知らなかった。

「それで、結論は？」

「発見した日記帳には、結論部分が破り捨てられていたんだ。それまでのことを考えると、どうしても納得が出来ない。あまりにもみづちりと書かれているから、こちらと同じ結論に達することが出来ると思って、推定の結論だけは出したんだ」

私はうなづきながら、キャットの話を聞いている。

「結論だけを言えば、この学校には、呪術的な陣が貼られているらしい。それとかなり強力なものらしく、今では禁術といわれるタイプのものに相当するらしい」

「なんでそんなものを…」

「古来の伝説を調べているうちに、この地域に古くから伝わっている伝承にたどり着いたんだ。そのうちの一つに、かなり近いものがある」

「どんなの？」

キャットは机の上においてあった本のうち一番上を取り、真ん中あたりのページを私に見せた。

「5族の争いがあった、その合戦場がここ。数千年前からあったとされている石碑が無造作に放置されていたんだけど、国はそれを撤去したうえで、ここに魔法大学校を作った。それが学史なんだ。でも、この伝承では、その合戦場はこの空間ではなく、5族というの

も、1族を除いて、この空間の住民ではなかったとされている。こ
こは、エネルギーの泉のようなものが湧きだしているところで、そ
の領有権を争ったとされている。だが、最終的に勝ったのはこの空
間の一族で、見た目は突然空間が増えたように見えたということ
らしい」

「：でも、詳しくは分からないね」

私が聞いたら、誰かが言った。

「この大学の礎石に、その時の石碑の土台を流用してるって聞い
たよ。問題は、その礎石がどこの建物なのかっていうのがわからな
いっていうこと」

「それよりも、いいやり方があるわよ」

私が思いついた事を話してみる。

「お父さんと呼んだらいいと思うの。ついでにお父さんの班員も」

「でも、うまくいくかな」

「電話掛けるわね」

まだ、遠隔通信の魔法は習っていないため、公衆電話からお父さん
へ連絡を取る。

数秒で話しは終わり、すぐにお父さんだけが来てくれることになっ
た。

「やってきたぞ」

さすがに魔法博士だけあって、瞬間移動は簡単に見せた。

「それで、その謎を追っているんだな。いずぞやの俺のように」

「そうよ、別にかまわないでしょう」

私はお父さんを班員が待っている机まで案内した。

「紹介するね、私の班員」

「よろしく願います」

「ああ、こちらこそ」

お父さんと班員が互いにお辞儀を交わす。

「それで、電話だったらよくわからなかったんだが、俺らがした研究を知りたいと？」

「そうです。この日記帳を見つけてしまい、それ以来、そのことを考えるようになってしまいました。教えてもらえませんか？」

グードがお父さんに聞いた。

「俺ひとりじゃ決められないな：班員全員に聞いてみないと」

そう言って、一瞬だけ黙った。

そして、5秒後までに次々と姿が現れた。

「どうしたスット。お前から連絡をくれるなんて久しくなかったことじゃないか」

「日記帳が見つけられた。そのことについてだ」

すぐに理由を察し、彼らは別のところへ移って小声で話した。

私たちには聞こえないように、魔法でシールドを張っていた。

「どういうこと？」

私は班員に聞いたが、誰一人としてわからなかった。

シールドが外されたのは、まるまる5分はたった後だった。

「結論を先に言おう。この大学校にはある種の結界が張られている。だが、空間自体は非常に不安定なもので、一瞬でも気を抜いていたら、元の場所へ収まってしまう」

お父さんが、私たちに説明をする。

「収まるって、どういうことですか」

「この日記を読んで、分かっているとは思いますが、この大学校は元々、この空間のものではなかった。そして、各空間の部族同士の抗争によって、この空間に留め置かれることになった。だが、他の空間の部族がこの地をあきらめているということは、決してありえない。なぜならば、この場所こそが、全ての空間の魔力の源泉たる場所だからだ」

そういうと、地面の下から妙な空気を感じた。

「来るぞ、レオは連れてきたか？」

「いいえ、なぜ？」

お父さんはお母さんに聞いている。

図書館の中は、ゆるい揺れにゆすられていたが、本が落ちるような強い揺れは来なかった。

「レオの力が必要になる、いや、レオだけじゃないな」

お父さんは、私をじっと見た。

「家族の力が必要だろうな。賢者、双子も」

「つまり、連合チームを作ろうっていうことですか」

お母さんが姿を消すと同時に、スピーがお父さんに聞いた。

「ああ、そういうことだ。アルゴ、デネボラと組んでくれ。前に書いたものが実現しそうだ」

「分かった」

「仕方がないだろう」

二人とも、互いに終始目を合わせようとしなかった。

「俺とキャットは、その補助と各自への情報伝達だ」

「分かりました」

大人しく、お父さんの言うことを聴いていた。

「他の者たちは、各々自由に行動してくれ。ただ、アースはフラとレオと一緒にいてくれ」

「分かったわ」

私が言うとお母さんがレオを連れてくると、空間がゆがみだしたのが同時に来た。

1000年ぶりの再会

空間の割れ目からは、誰かがこちらに向かって歩いて来ていた。

「久しぶりの空気だ」

「誰だ…」

わずかに土煙をたて、スーツに身を包んだ男が歩いてきた。
分厚いガラスを通して見ていたような場所から、はっきりと見えるようになつてきた。

「ワンダー族だ。1000年の間はさすがに長かったがな」

「ウルフと関係があるのか…？」

スーツが、彼に聞いた。

「ああ、こちらではそういわれているんだったな。忘れていたよ」

「じゃあ、やっぱり……」

「ウルフというのは、こちらの世界を除いた世界の民族の名前の頭文字をとって、”WOLF”という名前になったんだ」

「校長…！」

私も1年ぶりぐらいに見た校長が、いつの間にかそこに立っていた。

「久しいな、キグークス・ブラッティー」

「1000年前と、変わっていないようで」

「知り合いなんですか？」

私が、校長に聞いた。

「ああ。なにせ当時から一緒に研究をしていたんだからな」

「今でこそ、この校長なぞしているが、1000年前は、我々と一緒にいた」

「…校長って本当に何歳なんですか」

「知っていてもいいものと悪いものがあるんだ」

校長は私に笑いながら言った。

「さて、ここじゃ人多すぎないか？」

「いや」

ワンダーは指を一回弾くと、私たちを見知らぬ空間へ連れて行った。
「なるほど、ここに連れてきたのか…」

校長が、なぜか満足げに周りを見回している。

「1000年間も、よく守り通せたね。他の人たちは？」

「こちらへ位相を均しているところだ。もう少しで来ると思う」

「そうか、それは良かった」

「…校長、どういうことですか」

お父さんが、校長に聞く。

「少しばかり人数が多いな」

ワンダーが再び指を弾くと、私の家族と使い魔とジェミニを除いて消えてしまった。

「少しばかり残ってしまったようだが？」

「あの家族は、いろいろと使うことができるさ。だが、1000年前のことを繰り返すわけにはいかない」

「…1000年前って、何をしたんですか」

レオが、校長たちに聞いた。

「仲間が来たら話してやろう」

蒸留装置や、私の掌の大きさぐらいの厚さがある魔術書や、名前も知らないものが、部屋の中に散らばっていた。

「ああ、君たちは、後々協力してもらうからね。その時までにはゆっくりとしておいてくれたまえ」

校長が私たちに言って、指差した先には、10人ぐらい座れそうなソファがあった。

「…校長、あなたは、本当は何者なんですか」

「ん、どうしたんだね、座らないのかね？」

三角フラスコを片手に持ちながら、校長は私たちへ視線を戻した。

「使い魔がいらないわけじゃないでしょう。たしか、あなたはこの1000年間、誰も創造していない双子の賢者を創り上げたと聞いています。しかし、その使い魔たちは見当たりません。どうしたんですか」

お父さんが、校長へその事を問いたです。

言われてみれば、校長の使い魔を見た記憶がなかった。

「単純だよ、君たちに見せる必要がなかっただけさ。だが、その要望にこたえるだけの時間は十二分にあるな」

時計がない部屋で、時間をどうやってはかっているかわからなかったが、校長が来ていた上着を一回脱いではたくと、小指の先ほどの水晶のように透き通った小石が二つ落ちてきた。

「起きてくれ、トリマン。お客さんだ」

小石は、急に輝きだして、人の形になった。

かなり大人な感じの女性と、ガタイの良い男性だった。

「紹介しよう、女がプロキシマ、男がリギルだ。二人合わせてトリマンという」

「よろしくね」

プロキシマは、私たちに愛想良く手を振ってニコニコ笑っていたが、リギルはぶすつとした表情で、校長にだけ向いていた。

「何しにここへ出した。計画が頓挫でもしたのか？」

「いいや、彼らに君たちを紹介させようと思ってね。今回の計画のカギになる人たちだよ」

「そうか、双子に賢者に使い魔に…」

「盛り沢山だろ？今回の計画に使うのは、この家族だよ」

リギルは、私たちを始めてみた。

「…そうか、それで、核は？」

「ジェミニが勤めてくれる。この双子の使い魔だ」

校長がリギルに説明をしている。

「ちょっと待ってください、どういうことですか、核って？計画って？」

私の後ろに隠れるように徐々に動いていたジェミニが、一気に私にしがみついた。

それから、カストルが校長たちに聞いた。

「全ては1000年間待ったおかげだよ、それで準備が整った…」

「ワンダー、それは皆が来てからまとめて説明をすると云っただろう？」

「ああ、そうだったな」

ワンダーは何かを語りだそうとしたが、校長に止められた。ちようどその時、壁から人がにじみ出てきた。

「いやはや、急に呼び出しなんて聞いてないよ」

私と同じぐらいに見える人が最初に出てきた。

「…計画を始動するのか」

「ああ、そうだ」

お父さんよりも年上に見えた人が、校長に話しかける。

「1000年前の愚行を繰り返さないためのストッパーは、用意をしたのかね」

「無論です、師匠」

師匠といわれた人は、ここにいる中で一番白髪だった。

「…この人らは」

「ああ、今回の核になることになる者たちだ。1000年ぶりに、逸材がそろったのでな」

「…そうか」

「それで、私はどうすればいいのかなあ？」

「ローエリ、なんか変わったな」

「1000年間のあいだに、娘が出来たんだよ」

さらに1人、壁からにじみ出てきた。

「ローエリ：どういうことだ」

校長が、後から出てきた

「私の知識を継がすために、娶ったんだ。そして、この子を孕んだ」
「なるほどな…後継に知識を託すために、そうやって子孫を残すことを選んだのか」

「ええ、おかげで育児疲れとか出てしまっていて、第一線から退くことになってしまったけど、後悔はしてないわ」

娘の頭をなでながら、母親の顔をしているのが見えた。

「…さて、とりあえず、全員がそろったわけだし、乾杯と行こうか」
校長が、壁の一部分を強く押すと、床がせりあがり、ワインクーラーが出てきた。

「これを開けるときを待っていた。100年物のワインだよ。900年といえば、大良作が次々と現れた年で、このワインはその最後の1本だ」

それぞれ手にワイングラスを持って、乾杯をしていた。

「…あれ？ 私たちは？」

「ああ、君たちなら、後でちゃんと歓待をしよう、おそろくね……」
校長たちは、笑っていた。

笑いながら、ワインを飲み交わしていた。

開

1本のワインボトルを飲み干すと、校長が、私たちに彼らを紹介した。

「右から、ワンダー族の族長、ワンダーとその使い魔アクルックス。ローエリ族族長の妻ローエリ・サイバーブと使い魔ムリファイン。その娘、ローエリ・オポルツコスと使い魔ムリフェイン。オンジ族族長のオンジとその使い魔ベガ。フーエンズ族族長であられ、我々の師匠でもあるフーエンズさん。師匠の使い魔であるピーコックだ」「よろしくね」

私には、オポルツコスだけが、一番普通に見えた。

「ちなみに、師匠は、アンゲールス王国の1400年前の第3王子でもあったお方だ。しかし、魔法と王籍の選択を迫られたとき、王籍を捨てたため、継承権は存在していない」

「そもそも、そんな昔のやつらは、大半が死んでしまっているがな」フーエンズは、カッカカッと笑い飛ばした。

「さて、そんな事をしている場合ではない。すでに器は満ち溢れている。つなげることにしよう」

急に真面目な表情になおって、フーエンズが校長たちに指示を始めた。

「薬を彼らに。ジェミニは二人で一人だったな」

「そうです」

校長が注射器に何かを入れた。

すぐにそれが私たちの腕に突き刺さる。

「安心なさい。単なる麻酔薬です。それでは、いい夢を…」

フーエンズの声が、私をさらなるまどろみへと誘った。

起きた時には、私とスピカだけが、部屋の中にいた。

「さっきと同じ場所…?」

「そうだよ」

私が声に振り替えると、オポルツコスとムリフェインが私たちを見ていた。

「無理を言って、はずしてもらったの。大人たちは、どこかで作業中」

「私たちに何をするつもり？」

「別に？」

彼女たちは、私たちに近づいてきた。

「向こうでは、私は族長の娘として、ずっと格式ばった生活をしていたの。同世代の友人もできなかったし」

「それで？」

部屋の壁を背中に付け、警戒しながら話を聞いた。

「それでね、私と一緒に来てくれないかなって、思ったわけ。私が気に入ったわけだし」

「：しも断ったら？」

よく見ていたテレビでのセリフを、一度言ってみただけだった。

「：二度とここから出ることはできなくなるわよ。ずっとこの狭い、暗い部屋で、使い魔とずっと一緒。生きているかどうかもわからない状況で、ずっと過ごすことになる……」

「それはやーね」

誰かが言ったような気がした。

だが、その声は、私のものに間違いない。

「あれ：私の声のはずなのに……」

「始まったようね。残念」

オポルツコスが私の姿を見ていたが、私は彼女が確かにみているとということが分からなかった。

「扉は開かれた。人柱によりて……」

「師匠、いかがですか」

「うむ、ようやくこれで、行き来が自由にできるだろう…」

私は、空から見ている状態にあった。

鳥になったような感じた。

「聞こえてる？」

スピカの声だ。

「どこ？」

私は左右を見渡そうとする。

「そのまま聞いてて、アースは、今、スピカの中にいるの」

「どうということ」

「彼らの計画はこうだったの。時空を飛び越えて軍を送るためには、この部屋を経由させて送るのが一番。この部屋は、5層構造になっていて、一つ一つの層がそれぞれの時空と直結しているの。それが、あの魔法大学校の場所。そして、この部屋は大学校のすぐ下にあった」

「何となくわかった」

私はスピカの体の中にながら、話を続けた。

「つまりは、その部屋をすべての空間とつなぎ合わせるために、つかえ棒が必要だった。そのつかえ棒に選ばれたのが、わたしたちだった…」

「簡単にいえばそういうこと。でも、それだけじゃ、つかえ棒の役割は果たせない。だから、1000年間待ったの」

「魔力の源泉たるこの場所で、魔力が満ちるのを待ったために…」

「そう。そして、アースが”魔力”に分解される直前に、どうにか意識をスピカの中に入れることができた。でも、体は魔力とともに魔法大学校の空間とほかの空間を開くための扉のつかえ棒となっていました」

「じゃあ、どうしよう…」

「ほかの班員を見つけるのが、一番早いと思うんだけど。問題は、その班員たちはどこに飛ばされてしまったのか、全く見当がつかないということ」

私たちは万策尽きてしまい、どうしようもなくなっていたところに、声を掛けてきた人がいた。

「いや、策ならある」

「その声、まさか…」

振り返ると、アルゴがいた。

合流

私たちがいたのは部屋の天井だった。

そして、そのすぐ後ろには、オオカミではなく蜘蛛のような格好になっているアルゴがいた。

「あいづらなら、行きそうな場所はわかる。封印されていても、どうにか生きていける奴らだ」

「封印されていても、いけそうな場所なんですか？」

「ああ、結界外しのプロがいるからな」

私たちはそれを信じて、アルゴについていくことにした。

30分後、アルゴが案内したのは、私の家だった。

「ここって、実家じゃない。こんなわかりやすい所に……」

「いいから黙ってついてきて来い」

アルゴにすごまれて、私とスピカは一緒に静かになった。

家の裏手にある庭へ入り、物置のすぐ横のすきまで、アルゴは何かをつぶやいた。

とたんに家や物置が巨大化し、私たちは物置の下の隙間へと入って行った。

「ここが、秘密の場所だ」

「アルゴ、ようやく来たか。きみの主人は」

「次元の狭間です。おそらくは時空の支えとして使われているのでしょう」

そこには、お父さんの半の人たちが私たちと同じ大きさで集まっていた。

「もしもの時のために、ここずっとそのままにしておいてよかったね」

女性が言った。

「あ、そういえば、ちゃんと自己紹介してなかったわね」

使い魔がいなかったりしたが、紹介する時にはちゃんと使い魔も出していた。

「私はイスール・マラーイカ、イースって呼ばれているわ。で、私の使い魔は、この羊」

「ハマルって言います、よろしくお願いします」

「で、私から見て右側から、マルヤハ・アングラス、使い魔はアウストラリス。見ての通り、騎士風の戦士よ」

彼らは同時に敬礼をした。

二人とも、かなり鍛えた肉体をしている。

「ラカール・ストール、ラカってというのがとりあえずの呼び名ね。でもルールとも言われる時があるわ。使い魔は、メデューサの姿を模したミラよ。ここだけの話、この子はあなたのお父さんの初恋の子なのよ」

「えっ」

「あなたのお母さんと付き合う前に、ラカと一緒にいたのよ」

私はそのことを聞いてかなり驚いた。

「それってホント？」

すぐ横で座っていたアルゴに聞いた。

「ああ、本当だよ。だが、彼女じゃなくて、フラを取った。それだけの話さ」

アルゴはけだるそうにあくびを一つした。

フラというのは、私のお母さんの呼び名だ。

「それで、ちょっと離れたところにいる、あの二人は、女性のほうがプレアデス・ケーティーで、男のほうのコグノーメン・トレミー。プレの使い魔はサダルメリクと言って、まあ、見た目は普通の人ね。でも、そこはかとなく、貫禄を感じない？」

「えっと、どう言えばいいか……」

私がどもっている間に、イースが紹介を続ける。

「コグの使い魔は、あそこで帽子かぶっている少女ね。あと、あの

帽子取ったら怒られるから気をつけること」

「そうなんですか」

「ええ、私たちの前だとふつうに脱いでくれるんだけどね。さすがに、ね……」

何か秘密があるようだが、気にしないことにした。

私たちの紹介を終えると、すぐにアルゴが起きだし、私たち全員に言った。

「おそらく、主人は、次元の狭間で支えに使われているものと思われます。問題は、どうやってそこに向かうかなんですが……」

「そもそも、次元の狭間って、どこにあるの？」

私たちは、そこまで習っていなかった。

「あの塔を見ただろ。あれが次元の狭間といわれているものだ。あそこには、魔力の源泉たる場所がある。ただし、非常に不安定のため、常時開いておくためには、何かしらの支えがいるんだ。スペシア一族は歴史に載っていないほど昔から、その見張り番をしていた」私が知らない歴史の数々を聞かされて、何を言っているのか分からなくなった。

アルゴはそんな私を気にせずに話を続ける。

「本家が潰えてから、その場所自体を封印しようと何度も繰り返してきた。本家はそんなことをさせようとしなかったからな。だが、その幾度の実験もいずれも失敗に終わり、そして1000年前のあの事件が起きた」

「ウルフたちによる気象異常ね」

スピカが言う。

声としては、私の声もスピカの声も今は一緒だから、違いはない。「そうだ、その時に使われた魔力の総量は、推定不能といわれるほど巨大だった。いったんは魔力の源泉も尽きたと思うほどだった。だから、当時のスペシア一族は、家族会議にて見張り番の役目が終わったことを宣言、それからその場所のことはだれにも伝えなかった

た」

「でも、校長は知っていたわ。校長はスペシア一族なの？」

「いや、彼が知ったのは、単なる偶然にすぎない。非常に野心家だった彼は、師匠といわれる人につき従いさまざまなところへ旅をした。その中の一つがああ場所だったんだ。師匠の隠し倉庫として使われていたものだったが、そこと魔力の源泉に共通しているものがあった。それが次元の狭間といわれる場所だ」

アルゴの言葉を継ぐように、アウストラリスが話し出す。

「校長がそのことに気付いたのは隠し倉庫に入って1分もたたなかつたといわれている。それほどまでに強力な能力の持ち主だったわけだ。そのことをフーエンズに話すと、それを使い、さらに魔力の増強を図るという事を持ちかけた。それを失敗してしまったのが、1000年前なんだ。その時の計画は詳しくは知らないし、知らされることもない。だが、推定だが、隠し倉庫にためられていた魔力と、魔力の源泉から絶えず送られてくる魔力を混ぜ合わせ、魔力の源泉からあふれ出てくる量を増やそうとしていたといわれている」

「結局、全部失敗してしまったんですね」

私がアウストラリスに聞いた。

「ああ、結果的にはそうなってしまった。だが、今回はまだ止める機会がある。それも今すぐなら可能だ」

「…その前に一つ、なんでそんなことを知ってるんですか、いろいろと」

小さくなったデネボラが彼らに聞いた。

「人には秘密っていうのがあるもんさ」

遠い眼をしてつぶやいた。

それから10分もたたない間に、お父さんたちがいそうな場所を調べた。

アルゴが、実家にしまってあった教科書をひっぱり出してきていた。「あの塔は5層構造になっている。一番上にあるのが、この次元だ。

この次元と次元の狭間をつなぐための通路に1人はいるだろう、塔の中に入ってしまったら、それぞれの次元に行き来するのはとても簡単だ。上下層には階段がある。順々に最下層まで辿っていければ全員助けることができるはずだ」

「次元の狭間でいなくなったのは、レオ、スット、フラ、アルヤ、ジェミニだな。ジェミニは双子だから2人で1人となっているようだな。問題はどの層にだれがいるのかというのがわからないっていうことか」

「見つけ次第連れて帰ります、私の家族なんだから」
私はスピカと同時に言っていた。

「そうだな、それにアースの体もなくなってたな。5層のどこかにあるのだろう、それも探しておかないと」

「ならば、行きましようか。われわれの友人、そして家族を捜しに」
デネボラが全員に言うのと、全員一回だけうなづいて、物置の下から出て、次元の狭間に行くために、この次元からの入口がある魔法大
学校へ向かった。

第1層目

魔法大学校があった場所に着くと、生徒や教職員が建物から逃げ出しているところだった。

「どうしたんですか」

スピカが私たちの代わりに、すぐそばを走っていた先生に聞いた。

「避難命令が出たんだ。校長先生からね。君たちも、早く逃げなさい」

「どうして避難命令を？」

「さあ。校長先生が考えられることは、よくわからないからね」

先生は肩をすくめるだけで、詳しく教えてくれなかった。

私たちはそんな先生たちの姿が見えなくなるまで、逃げるふりをし、見えなくなるや否や、すぐに引き返し図書館の中へ飛び込んだ。

図書館の中は、誰もいなかった。

コツーンコツーンと、私たちが歩いている音が、響いている。

「ここだ」

アルゴが、私たちに言った。

言われなくても、目の前に黒い空間のゆがみが継続的に発生しているから、一発でわかる。

「どうなるかわからん、気合い入れていくぞ」

アルゴが最後に、私たちに振り返った。

穴に飛び込むと、私が最初につれてこられた場所にいた。

「…第1層目、この空間とのつながりか」

周りを見ると、全員飛び込んだはずなのに、アルゴと私の班員だけしかいなかった。

「ほかの人たちは」

「…しまった、弾かれてしまったか。まさか、マーカーをつけられ

ていたとは……」

「どういうこと？」

スピカが、アルゴに聞いた。

「この空間は特殊な結界が常に張り巡らされていて、その結界によって、入れる人と入れない人を選別するんだが、その時に選別するために、マーカーをあらかじめつけておくという方法があるんだ。俺らはDNAにそれが刻まれているが、ほかの人たちには、持っていない。そのために、体のどこかに代わりの者をつけて入ることができるんだ」

「代わりに説明をしてくれて、どうもありがとう」

急に声が聞こえてきて、私たちはその声のほうにぱっと振り返った。

「君の家族は、さすがにここの守護者の血族だっただけはあるね。いい支えになっているよ」

「ワンダー、いったい何をしたんだ」

私とスピカが同時に言った。

同時に言ったつもりだったが、一緒になっているため、声は一つしか聞こえない。

「まだ何も。だけど、時間の問題だろうね。もうすぐ、器は充ちる。そうしたら、諸国より大軍勢が押し寄せるだろうね。第1階層は壊滅し、第2以下の階層に隷属される……」

恍惚の表情を浮かべながら、うっとりとした声で話す。

私たちは、結構引いていたが、ここまで来たからにはもう逃げることはできない。

「ああ、そうそう、運よく同じ力を持っていたあの双子にも協力してもらっているよ」

おそらくはジェミニのことだ。

彼らが最初に残されたのはそういうことらしい。
ワンダーは最後に私たちに言い残した。

「君たちの力も、魔力の源泉に吸い込まれていくかもね。力が多い

ほうがありがたいし：かといって、このまま残られるのも癪しゃくだね」
ワンダーが指を鳴らすと、影が何体も出てきた。

「やっておいでくれ」

ワンダーが姿を消すと同時に、影が私たちに襲いかかってきた。

「lux veritatis」

アンタレスが、一発で片をつけようと呪文を唱える。

光を意味するもので、唱えた本人から太陽にも匹敵する光量が発せられる。

影は一瞬で消滅をした。

「さっすが」

影を追い払ったところで、第1層目の支えになっている私の家族を捜した。

「アルゴ、どこにいるのかわかる？」

私が犬の恰好で地面を鼻で嗅いでいるアルゴに聞く。

「匂いじゃわからんな」

そう言って、座ると呪文を唱える。

「pacta sunt servanda」

アルゴが言うと、青白い光とともに、お母さんの使い魔のアルヤが床に這っていた。

「アルヤ、とりあえず蛇から別のになってくれ」

「これが一番楽なんだけどなー」

アルゴに促されて、しぶしぶといった感じで女性の姿へ変わる。

「それで、私がいなかった間にもちゃんとしていた？」

「そんな話をしている場合じゃないんだ。泉を暴走させようとしているようなんだ。1000年前のことを繰り返してはいけない。今すぐ、第2階層へ行かないと…」

アルゴが今の状況を端的に説明をした。

「わかった、急ぎましょ。私もあの人がいなくなってしまうたら遠からず消滅してしまうし」

「あつ、あのっ」

キヤットがアルゴとアルヤに聞いた。

「消滅って、どういうことなんですか。授業じゃ詳しく教えてもらってないんですけど…」

「使い魔っていうのは、魔力の塊だ。その魔力は主を経由してあるじもらっている。生きているうちは問題ないが、主が死んでしまったら、その魔力の供給が断たれてしまう。そうしたら、使い魔は文字通り消滅してしまうんだ」

アルゴがさみしそうに話す。

「でもね、魔力の源泉から直接取れるようにすれば、そういうことはなくなって、文字通り永久に生きれるんだけどね」

アルヤが何とも言えない表情を浮かべている私たちにあわてていった。

「じゃあ、魔力の源泉って、すごいんですね」

改めて、そのことを実感する。

「だからこそ、誰彼かまわず狙ってきたんだがな」

アルゴが言った。

「さて、ここで油売っているわけにはいかない。第2階層へ向かうぞ」

「外に放置されているお父さんの班員は？」

スピカが聞く。

「マーカーをつけている暇はない。ざんねんだが、置いていくしかないな」

アルゴが会話を切って、部屋の端にある会談で下に降りた。

第2層目

第2階層に降りると、急に空気が冷たく感じられた。

「ここは…」

見ると、見回す場所すべてに霜がついている。

「ようこそ、火がない世界へ」

そう言って立っていたのは、長袖のローブに身を包んだローエリの母親のほうだった。

「ローエリ族は、氷系統が大の得意でね。だからこういう風に火を使えなくさせるという結界も発達したんだ」

彼女はそういうと、何も言わずに右腕から氷の筋を私たちに向けて発射した。

それを見た瞬間、思わず鼻で笑い飛ばしたのが、デネボラだ。

「"per eo"」

消えるとか滅びるとかの意味合いで、基礎呪文の一つとされているものだが、デネボラはそれを使って、相手が出したすべての氷や結界を一瞬で消した。

「…どういうことだ」

「どういうも何も、見ての通りだ」

デネボラは自信満々に続けた。

「貴様がこれから出す呪文についての効果もすべて抹消した。ついでに言えば、この場所にいるであろうアースの家族の居場所も暴いた^{あば}」

そう言われてデネボラの視線の先をたどっていくと、氷の直方体に入れられたジェミニが見えた。

その氷は、彼らを包むようにはりついているが、さきほどのデネボラの呪文にも耐えたようだ。

「さすがに基礎呪文では限度があるな」

デネボラはそう言って、アルゴのほうに向きなおった。

「よろしく頼む」

「口調は気に入らないが、しかたがない」

そういうと、落ち着き払ったようにアルゴは唱える。

”mundus abeo”

魔法の呪文には、基礎呪文を組み合わせることによって新しい効果を生み出すことがあるらしい。

詳しいことはまだ習っていなかったが、アルゴはそれをしたようだ。みるみる間にジェミニを凍結させていた氷が蒸発し、数秒の間に彼らは自由の身になった。

「ジェミニ！」

すぐに飛び出したのは、ジェミニの主であるクロだった。

しかし、その道に立ちはだかるかのように、サイバークは割り込んできた。

「逃がさないよ」

そのとたんに、アンタレスがクロを弾き飛ばしてサイバークと向かい合い、右人差し指と中指をくっつけ、他は握り、彼女に向けて指した。

“flamma”

炎が彼女に向かって突き進む。

「ちっ」

短く舌打ちをすると、着ていたローブを翻し、炎をよけると同時に、その場から消え去った。

「：別のところへ行ったようだな」

彼女がいたあたりの匂いを嗅いでいたアルゴが、はっきりと断言した。

その向こう側では、帰ってきたすっかり冷えているジェミニを抱きかかえているクロがいた。

私たちはクロのところへ歩いて行って、みわがクロの肩に手をかけて言った。

「よかったね」

「ああ、ありがと。でも、まだまだこれからなんだな」
ジェミニの頭をなでながら、クロが立ち上がった。

「行こう」

クロが先頭になって、部屋の隅にあった下に降りる階段をおりだした。

第3層目

第3階層は、誰もいないような感じだった。

「あれ？ここにはだれもいないのかな？」

私がひとりごとを言った途端に、影がひとりでに離れていった。

その影が自然に向かった先に、男が黒いフードをかぶって立っていた。

「だれだっ！」

ポラリスが叫んだ。

「名乗る程でもない。まだまだ修行中の身だからな」

「その声はオンジだな」

アルゴがその声の主に向かって話す。

「影を吸い取って、そのものを意のままに扱う能力。指定魔法の一つだったはずだが」

「我が世界では、指定魔法といったややこしいものはないんだ。残念ながら」

「指定魔法って？」

アルゴのすぐ側を飛んでいるスピカが、アルゴに聞いた。

「こちらの世界では、使ってはいけないという魔法がある。それが指定魔法と言われるもので、不可魔法とも言われるな」

「なんでそんなモノ作っただんだ」

私の後ろの方から、クロがアルゴに尋ねる。

「人というのは、知的探究心を極めずに居れない生き物なんだよ。

それがため、指定魔法なるものを作って、教えないようにせざるを得なかったのだろう。最も、我が世界では、知的探究心故に制限をかけるということはなかったのだが」

「それはあなたのところの話だろう。それより、我々の影を返せ」

オンジが一人で自分の言葉によっているところを、デネボラが一歩前へ出てオンジに言った。

「残念ながら、それはできない相談だ」

そう言って、影の一つを操りだした。

「なっ、体が勝手に……！」

アルクトウルスが右腕を伸ばし、私たちへ向けた。

”obstantia”

アルゴがアルクトウルスが繰り出してくる魔法を防ぐ呪文を唱えた。瞬時に、私たちの前にオレンジ色をした半透明の壁が構築される。

”ligo”

壁ができると1秒ほどの間を開けて、デネボラが唱える。

”remissio”

その言葉と同時に、アルクトウルスとオンジの繋がりが絶え、さらに、全ての影も開放された。

「行くぞ」

アルゴが言った直後に、ジェミニとデネボラが同時に言った。

”defectio animi”

言った途端に、オンジはその場でクルクルと回って、倒れた。

「だれかこれで縛っとけ」

ヒモをその場で空中から取り出したのは、ケフェウスだ。

そして、そのヒモを使って、オンジを縛り、それからアルゴがあちこちを嗅ぎまわって探した。

「ここは誰がいるの？」

「匂いの、母親だと思うな」

あたり一面を嗅ぎまわってから、アルゴは真ん中に座って、呪文を唱えた。

”nihilsine causa”

唱えた途端に、アルゴの頭上から、突然人が落ちてきた。

「う……ん……」

何言か唸ると、パチリと目を覚ましたようだ。

「ああ、アルヤ。いたのね」

右の後頭部を痛そうに軽く抑えながら、お母さんの فرانセ が立ち

上がった。

「フランセ、やっぱり生きてたのね」

「嫌そうな声出さない」

フランセは、蛇の姿になっているアルヤの鼻の頭をツンとつついて言った。

「あたしがいなくなっちゃうと、どうせ、寂しいかと思ってたんでしょ」

「別に、そんなこと思ってなんて…」

「思ってたのね。まあいいわ。そんな性格だって、ずっと前からわかってたし」

フランセはアルヤと話し終わると、私に振り向いた。

「それで、娘はどこに行ったの。スピカがいるのにあの子がいないのは不自然ね」

「アースは彼らに連れ去られたわ。フランセと同じようにね」

「そう…」

フランセはスピカの話の聴くと、アルヤの頭をなでて私たち全員に言った。

「この場に見あたらないのは、スットとレオだね。アースの体も」

言いながら、私たちの顔を見た。

「その全てを救出しないと、この扉は完全に閉まらない。魔力の源泉を守る一族だからこそ、私たちがしないといけないの。多分、最下層は私たちの一族とジェミニしか入れないと思う。でも、そこまでついてきてくれる？」

「無論。ここまで来たんですから、ついていけないわけがないですよ。ねえ、みんな」

みわが、私たちの班員全員に聞いた。

決意みなぎる瞳で全員が同時にうなづいた。

それを見て、フランセがうなづき返した。

「じゃあ、行くわよ」

そして、フランセは部屋の隅にある階段を、一段一段、しっかりし

た足取りで降り始めた。

第4層目

一段一段降りていくと、徐々に暗くなり、第4層目についた時には前に立っているはずの人も見えないほど暗かった。

「真っ暗…」

「そうね」

私はスピカに話しかける。

「離れるんじゃないよ」

スピカの体は、アルゴの毛の中にうもれていた。

真っ暗の時には、こうやって密着させている方が、安心出来た。

「待ちくたびれたぞ」

おそらく全員が階段から離れたときに、見えない敵が声を出した。

「だれだ！」

「真名を聞いてどうするつもりだ…師匠の邪魔はさせない」

「校長先生ですか…？」

私は、師匠と言っている声に聞きおぼえがあった。

「…ばれたか」

闇の向こうから何かの雰囲気伝わってくる。

お母さんがそれに対応する形で叫んだ。

「divina gratia」

電線が切れて暴れているときに、火花がはじけどぶ。

「リギル、プロキシマ。coincidentia」

闇が一瞬で晴れ、校長の姿がはっきりと見えた。

「やるぞ」

校長の両脇に、リギルとプロキシマの二人の使い魔がいた。

3人の姿が見えた瞬間、再び太陽のような光が部屋に満ち溢れた。

「行くぞ」

光がおさまると同時に、アルヤが唱える。

「caecitas」

再び、目の前が真っ暗になる。

「チッ」

校長も同じらしい。

「盲目とは、よく思いついたな」

「いましがた思い出しただけさ。偶然の産物だよ」

そう言っていたのは、多分お母さんとアルヤのどちらかだろう。

「sol」

再び校長が言うと、またもや光が見えた。

「らちが明かないな。一気に攻めるぞ！」

校長が叫ぶと、何も言わずに腕で空を切った。

とたんにお母さんの服が、鋭利な刃物で切り付けられたように裂かれた。

「お母さん！」

私が叫ぶが、お母さんは一切動じずに一言だけ言った。

「marmor」

言うと、校長が一瞬で固化した。

「…ふう」

ため息をつきながら校長のところへ近寄る。

「校長先生よ、なぜ、あなたが？」

「…世界を再構築するためだよ。すでに白い蛇は与えられた。我々がそのための扉をあける」

そう言って、姿を消した。

「お母さん…？」

「白い蛇か。もう時間はあまり残されていないようだな」

お母さんが呟きながら、手で立方体を作り、言った。

「cubus」

同時に、箱のようなものが現われて、中からお父さんが出てきた。

「あなた、起きて。白い蛇が別の空間で見つかったそうよ」

お母さんがお父さんの傍らに座って言った。

「：：そうか。アルゴはいるか？」

「ここに」

のそのそとお父さんのそばへ私を乗せたまま歩いていく。

「アースとレオは、さらわれたままか」

「アースの魂だけは、スピカの中に」

アルゴがそう言うのと、お父さんが長く息を吐いた。

「そうか。まだ話していなかったが、その時間もないだろう」

お父さんが立ち上がると、アルゴもおとなしくついていく。

「行くぞ。最後の一人のところだ」

そう言って、お父さんが階の端っこにある階段から降り出した。

第5層目

階段を下りて、最後の階層のところへくると、急に風を感じた。

「きゃ：っ」

目を守るために無意識で、目の部分を覆っていたが、ふと周りを見ると、私だけだった。

「あれ…」

「俺たちはここからしか見ることができないようだな」

声に振り返ると、透明な壁の向こう側にお父さんたちが立っていた。私以外の人たちは、通ることができないようになっていているらしいが、声は聞こえてきた。

「第5階層は、アースだけが行かなきゃいけないらしい：っ、それだけでもなさそうだな」

壁の向こう側には、私が見知った顔以外の人たちも来ていた。

「どうやら別世界の人たちも合流したようだな」

アルゴが、その人たちを見ながら言った。

「なんで、落とし穴の先がここにつながってるのよ！」

「仕方ないじゃん、あそこではここしか道が無かったんだし」

「えっと、どなたでしょうか」

いろんな人が、一気にこっち側に来ていた。

「ああ、ごめんなさい。私は早田桜^{さわたくくら}。この塔では、どうやら第3階層って言われているところから来たわ。それで、私の横でこけているのが、下から順に鈴木珠子^{すずきたまこ}、伊予葎^{いよりつ}、生井么子^{いづちこ}。よろしく」

「こちらこそ」

私が手を伸ばして握手をしようとしたが、スピカの手では、なんだか腕を動かしているだけにしか見えなかった。

「それで…」

私は握手をあきらめて、別の人たちへ聞いた。

「ああ、俺たちは第5階層から来た。俺は、晴足正和^{はれたるまさかず}だ。こっちは、

俺の彼女で伊地隼子^{いちじゆんこ}、その双子の妹の伊地澤子^{いちさわこ}。父さんと一緒に来たんだが、どうやら、ここじゃなくてあの壁の向こう側へ飛ばされてきたらしい」

晴足が指さしたところは、私のお父さんと名刺交換をしている人がいた。

「なるほどね」

「で、自分は第4階層から来た。ミヒヤエル・エルグランドンだ。火を使った攻撃魔法を得意としている」

「ほんと、私と一緒に力だ!」

喜んでるのは、早田だ。

「そうか、それはよかった。同じ力の者がいると、その力は増幅しやすくなる」

「よろしくお願いします」

早田はミヒヤエルのお辞儀をした。

「ああ、いろいろ教えてやろう」

そして、最後にもう一人、壁のところへへばりついて、ここから出たがっている少女がいた。

私は、その少女のところへ行って聞いてみた。

「あなたは?」

「わっ、私は、霧島鹿野子^{きりしまかのこ}。魔法使いの見習いで、なんで私がこんな所へ飛ばされてきたのか……」

「それは、君たちにしかできないことがあるからだ」

その声は、一番聞きたくない人だった。

「師匠……」

私がつぶやくと、その人は、私に言った。

「ほかに名前はあるぞ。各階層でいろいろとしてたからな。だが、ここに来る直前の階層で手に入れた、これこそ、最も儂が必要としていたものだ」

「教師、何をしているんだ!」

「なんだ、お前も来てしまったのか。まあ仕方ないだろう。この井

戸を守る5階層の長の直系だ。力は十二部にあるだろう」
そう言って、フーエンズは、ポケットをまさぐり、白い蛇を取り出した。

「…汝、我が望みを叶え、世界を再び一つにせよ。全ての階層を統一し、何人たりとも我が命に叛く事の無き様にせよ！」
いうと、蛇に命が吹き込まれ、動き出した。

蛇

蛇は、勢いよくフーエンズから離れて飛び出したが、そのまま地面を這ってフーエンズのほうへにじり寄っていた。

「いかん！」

お父さんが叫ぶのと、ミヒヤエルが炎でその蛇の方向を変えたのは、同時だった。

「なんなの?!」

「あの蛇は、不死の象徴であるウロボロスだ。命を吹き込んだ者に、永遠の命を約束するとされている。それと、特別な力も」

「特別な力？」

スピカの声が、妙に消えていく。

「君が持っている力だよ」

ミヒヤエルが私に笑いかけてきた。

「私が？」

「ああ、君のお父さんから説明を受けてないのか」

ミヒヤエルが教えてくれた。

「ここに来た人たちは、この塔の各階層の守護者なんだ」

「守護者？」

「そう。各階層は、各世界へ通じているんだ。その世界に供給される魔力の量は、守護者によって無意識に調整される。その源泉なのがここだ。そして君は、その根元である源泉の湧出量をコントロールする力がある」

「…確か、お父さんの班員達が言ってたっけ」

「源泉の話か。そりゃいい。話を省こう。そこにいる白い蛇は、供給されている向きを変える力を持っているんだ」

「…つまり」

「使い魔は全てここから放出されている魔力によって形作られている。さて、それがなくなると？」

使い魔が消滅するということになることぐらい、私にもすぐに分かった。

「後は分かるだろ。さらに言えば、魔法で成り立っている社会は、全て崩壊するだろうな。それを防ぐためにも、この蛇を捕まえないといけない」

「素手でとれるんじゃない？」

「やってもいいが、火傷するぞ。高圧縮された魔法だからな」

ミヒヤエルが言った。

「じゃあどうするの」

「こうするのさ」

ミヒヤエルが指先からヒモを出し、蛇に巻きつけた。

”effigies appearo”

「うっ…」

言うのと、首にひもが巻きついたレオが出てきた。

「レオ！」

私はレオを見た瞬間に飛び出そうとしたが、声に引き戻された。

「いいのか、高濃度の魔力が体に満ちている状態で、不用意に触れるとどうなるのか」

フーエンズがニヤツと笑い言った。

「爆発するんだろ。それぐらい、僕にだってわかってる」

レオが言った。

「ほう…」

片眉をあげ、フーエンズが表情を変える。

その時、空気が一気に波打ち始めた。

「チッ」

ミヒヤエルが舌打ちをすると、その場にいた全員に言った。

「来るぞ！」

私には何かさっぱり分からなかったが、次の瞬間に出てきたものを見て、一瞬で理解した。

私の体

地面が割れ、粘液状の物質が溢れ出してきた。

「始まってしまったか」

フリーエンズが、残念そうに言った。

その粘液状の中央に、透明な箱にいれられた私の体がいた。

「私だ！」

「だめだ、触るな！」

粘液条の物質が出てくると同時に、お父さんたちと隔てていた壁も崩れたようだ。

「残念だが、始まってしまったものは、もう戻せない。我々は、歴史を目撃するのだよ」

フリーエンズはそう言って、レオの元へ行こうとする。

それを阻止するため、腕を伸ばしただけで炎の壁を作り、ミヒヤエルはフリーエンズを遮る。

「蛇を捕まえるんだ！君たちなら、選ばれた者たちなら素手であっても捕まえられる！」

一番レオに近いのは私だ。

使い魔の姿であるから、さらにすばやく移動できた。

「レオ！」

私はレオに叫んだ。

「姉ちゃん、大丈夫だから。それよりも、姉ちゃんの体を拾わないと」

「案ずるな。すでに策はある」

ミヒヤエルが一言いう。

「教師と呼ばれてたな。本名を聞かせてもらおう」

「：フリーエンズだ」

「フリーエンズか、いい感じの名前だ。わが師にもフリーエンズと呼ばれていた人が1人いた。ここにくる1か月ほど前に行方不明になり、

その後、死体で発見された。もう一度聞く、お前の真名^{まな}はなんだ」
二人がやり取りをしている、その横で私はお父さんたちと合流した。
他の守護者たちとも一緒だ。

「君たち全員で、同じことをするんだ」

風が徐々に強くなり始めた塔の中で、お父さんがまとめて指示を出す。

「フーエンズは、ミヒヤエルに任せることにして、我々はあの源泉を調整する必要がある」

「あれが、すべての魔力の源泉なんだ…」

私の体が浮き沈みを繰り返しているが、あれが栓の役割を果たしているらしい。

「私の体をとると、もしかして、源泉が暴走して…」

「魔力は非常に普遍的なものになるが、一方ですべてのものに干渉を及ぼしてしまう。その結果は、世界はすべての層を巻き込んで破壊される。我々は、至近距離にいるんだ。人間の器では、あれほどの魔力を吸収して、維持することはできないだろう」

お父さんが、淡々と話す。

「みんな、協力してくれるか」

その場にいた全員に、再び聞く。

誰も何も言わない瞬間をはさみ、私が真っ先に言った。

「やるよ、私はやるよ。何があっても」

私の言葉を聞いて、誰しもうなづき始めた。

「では、そのやり方を教えよう。非常に簡単なことだが、1つでも間違えたとなんに、すべては失敗する」

そういつて、お父さんは、それぞれの位置と何をするのかを教えてくださいました。

たしかに、単純なものではあった。

源泉封印

フーエンズが私たちの計画に気付いたのは、配置についた時だった。

「お前ら、何をする気だ」

「いくぞ！」

お父さんが、その場にいた全員に聞こえる声で叫ぶ。

手に持っているのは、野球ボールぐらいの大きさで、堅そうなボールだ。

あれを、五芒星を描くように渡していくらしい。

私は、本当ならお父さんのところにいるべきなんだろうけど、代わりに第2階層からきた霧島香野子のところに行った。

「大丈夫？」

ボールを投げようとしているお父さんを固めて見ながら、私は香野子に聞く。

その顔は、ほかにする人がいないから仕方なしというあきらめの表情にも見えた。

フーエンズはボールを投げる直前のお父さんのほうへ向かおうとしたが、それを刃を交えているミヒヤエルが遮る。

「お前の相手は俺だ！まだ、俺の質問にも答えていないぞ！貴様の真名を教えろ！」

「あんたに教えるほど、わしは馬鹿じゃない」

真名を教えるということは、その人のすべてを委ねるということだと、学校で教えてもらった。

だから、真名は隠される。誰にも、本人にもばれないように。

「大丈夫、私がしないと」

ボールがこっちへ向かって投げられると同時に、私は香野子がそういったのを聞いた。

実際には、ものすごい速さで来ているはずなのに、ゆっくりと感じ

る。

ボールは香野子の手にとまると、すぐに香野子は投げ返す。
向かうのは、第3階層の面々へ。

その階層の出身者ならだれが受け取ってもいい。誰が投げ返してもいい。

だから、彼らは女子が受け取り男子が第4階層へ向けて投げ返す。
だが、第4階層の出身者は、ミヒヤエルだけ。

「ミヒヤエル！」

叫び、戦っている彼の方向へ一気に投げる。

ボールは、魔力が激しく渦巻いている中へ吸い込まれるように消えた。

その中では、二人が戦っている。

しかしその様子は、霧状になった魔力に遮られていて見る事ができない。

不意に、ボールが霧を突破してきた。

あのボールが第5階層の人たちに向けて、正確に投げ返される。

「よっしゃ」

受け取り、すぐにお父さんへ投げ返す。

お父さんが、受け取ると同時に何か言った。

とたんに、私の体の下にある泉が、沸騰し始めた。

復活

沸騰すると、泉からあふれていた魔力が少なくなってきた。

「どうなってるの、私の体は？」

私は、お父さんたちに聞いた。

「今なら外せるだろう。これで、最後だ」

お父さんが言うのと、私は使い魔の形のままで体がしまわれている箱に飛びついた。

「remissio」

デネボラが呪文を唱えると、箱は跡形もなく溶けた。

そして、魔力の泉と一体化し、元からなかったかのような感じになった。

「じゃあ、これで」

スピカは私にそう語りかけた。

「ううん、これからだよ。私たちは、いつまでも一心同体なんだからね」

そう言い残し、私はスピカの体の中から自然に離れていくのが分かった。

「ひとつの体にはひとつの魂しか入れることができない。使い魔は、限定的に自らの主人の魂を入れることができるが、そう長くはとどめておけない。元の体へ引き寄せられるのは、自然の摂理に沿った当然のことだ」

誰かが、そう言ったのを、確かに聞いた。

「ん…」

目を開けると、心配そうに私を見ていたスピカとお父さん、お母さん、それにレオの顔がすぐに見えてきた。すぐにそれは安堵の顔となった。

「…私、元に戻ったの？」

顔や手や足をぺたぺた触って感覚があるかどうかを確かめる。
服はあの時のままだから、ぬめっていたが気にするほどではなかった。

「よかったね」

地面に座っていると、後ろからクロたちから声をかけられる。

その時、金属的なものがカランと落ちる音がした。

「…今回もしくじったか」

フーエンズがそう呟いているのが、見なくてもはっきりと分かった。

転送

フーエンズは、しかし私のところに来ようとはしなかった。

「魔力の泉は沈み、我々の野望は今回はついた」

「あきらめるんだ」

ミヒヤエルが、フーエンズにそつと言う。

「……いや、諦めるわけにはいかない。我らは常に復活しなければならぬ。だからこそ、不信の芽はここで摘み取る！」

泉が一瞬で沸騰し、そして急速にあふれた。

「いかんぞ！」

お父さんが叫んで、シャボン玉のようなもので私たちをグループごとで包んだ。

すぐに、私がさっきまでいたところに魔力の塊があふれてくる。

ミヒヤエルは、フーエンズと共に外にいたが、どうやら平気なようだった。

「諦めろ！もう計画は終わりだ！」

「いや、まだだ！」

そんな風なやり取りが聞こえた。

だがそれもすぐに終わり、ミヒヤエルの叫びとともに、私たちはまたべつの、小さな部屋へと自動的に転送された。

そこには敵味方関係なくいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263k/>

魔法大学の謎

2011年11月12日17時32分発行